

中部学院大学大学院

人間福祉学研究科博士課程(後期)の特徴と履修の流れ

1. 本研究科の成り立ちと理念

中部学院大学大学院は 2001 年度に修士課程を開設し、多くの実践的研究者・研究のできる実践者を育成してきました。その後、2003 年度には博士課程(後期)(後期)が設置され、これまでに社会福祉学を中心とした幅広い人間福祉領域の研究者を輩出しています。

博士課程(後期)の中核にあるのは、大学院が掲げる学問体系「人間福祉学」です。

本大学院は、この「人間福祉学」という学問体系を全国に先駆けて、初めて大学院の研究科名にしました。

2. 「人間福祉学」とは

本研究科が大切にする「人間福祉学」は、単に社会福祉学を深めるだけではありません。

- 人間福祉学とは、社会福祉学を基本にすえながら、近接する人間諸科学を統合した、個人・家庭・地域社会・国際社会の Well-being の構築を目指した学問です。
- 本大学院は、この「人間福祉学」という学問体系を全国に先駆けて、初めて大学院の研究科名にしました。以来、本学大学院では、社会福祉学を基盤としつつ、看護学・理学療法学・スポーツ健康科学・教育学・心理学 など人間の生活・成長・健康・関係性に関わる諸領域を統合するカリキュラム・教育体制を設定し、博士(人間福祉学)の学位を授与してきました。

- このように、本学大学院人間福祉学研究科は、様々な学問を基底に置きながら、「人間福祉学」という学問の構築を目指している点に大きな特徴を有しています。
- これまで、本学大学院では、社会福祉学をはじめとして、看護学・理学療法学・健康スポーツ科学・教育学・心理学などさまざまな専門領域を基底に持つ大学院生が学位を取得してきました。

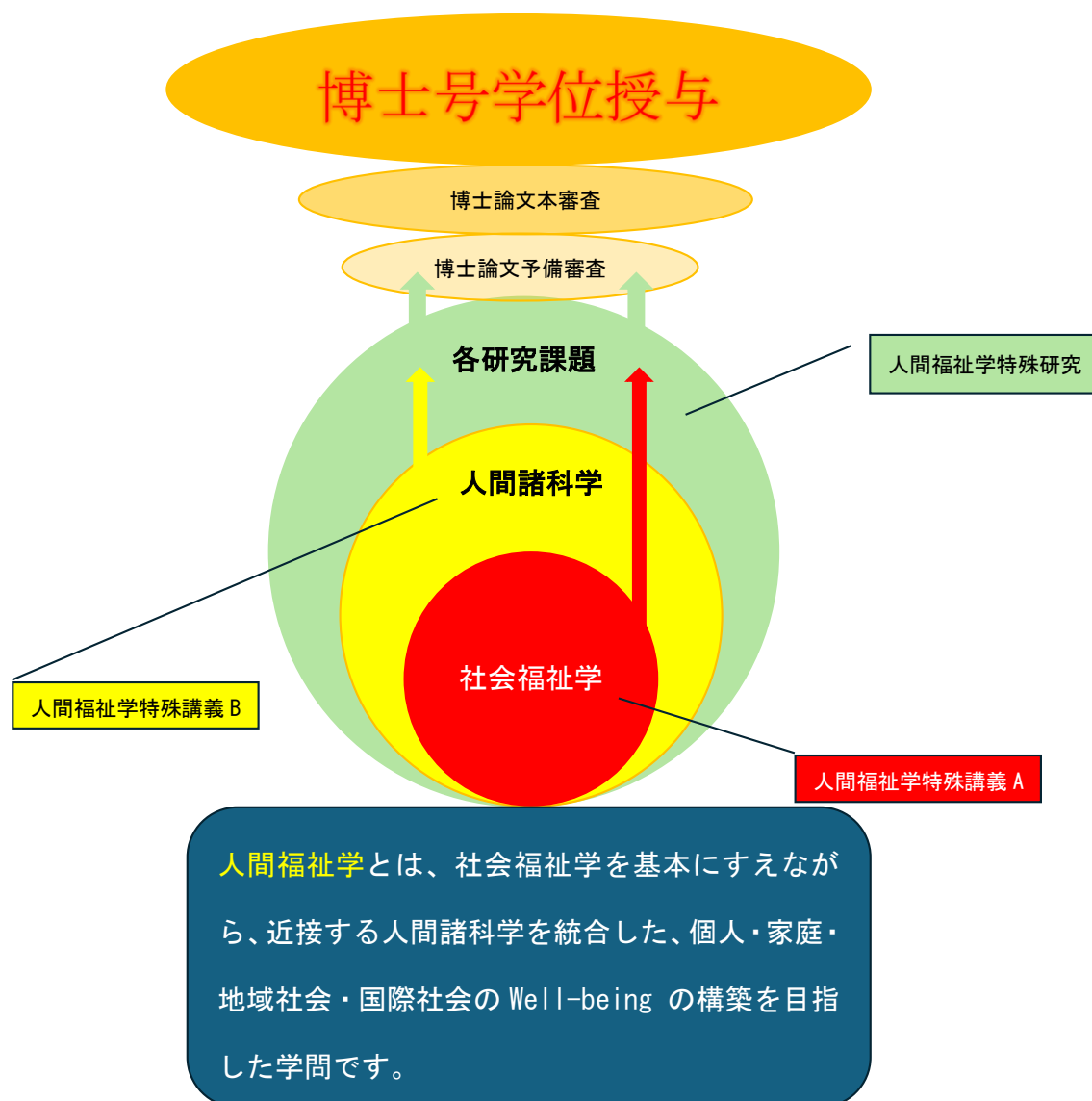
本学大学院の目的は次の通りです。

- 人々の「幸せ」とは何かを学術的に探求する。
- 生活のなかにある「つらさ・きつさ」を丁寧に受け止め、その中から光(希望)を見出し、理論化する。
- 社会に生きる人々の苦しみや悲しみに寄り添い、科学的方法論を用いて解決に向かう研究者を育成する。

博士課程(後期)は、こうした視点で人間と社会を見つめる新しい人間福祉学の構築を担う人材の育成を使命としています。

なお、本学大学院は、対面とオンライン併用でのゼミ・講義を行っており、遠方からの大学院生や仕事をされている大学院生にとって、学びやすい環境を整備しています。

図 人間福祉学研究科博士課程（後期）におけるカリキュラム構造



3. アドミッション・ポリシー(求める学生像)

「入学者受入れの方針」(アドミッション・ポリシー)

社会福祉学やその近接領域(看護学分野、理学療法学分野、スポーツ健康科学分野、心理学・教育学等分野など)に関する専門的な知識を持ち、現代社会における社会福祉が抱える問題点に対する自立した研究力と、研究・教育場面や実践現場における問題対応力・指導力を身に付けることに対し、強い意欲を持った人

博士課程(後期)では次のような学生を求めています。

- 社会福祉学やその近接領域における専門知識を有している。
- 現代社会の福祉課題に対して、自立した研究を行う意欲がある。
- 研究・教育職、または実践現場の指導者として、高度な問題対応力・指導力を身につけたい。
- 実践現場の課題を学術的に探求し、社会に還元したい。

4. カリキュラムの特徴(カリキュラム・ポリシー)

「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー)

自立して研究が進められる能力と実践現場での研究・開発・指導能力を養うために、各年次において専門的な研究指導をします。本人が希望した教員を主担当として配置することを原則に、副担当教員も配置して万全の体制で研究指導を開始します。副担当教員の配置により研究指導のみならず円滑な研究活動に必要なサポートを行います。加えて、社会福祉学やその近接領域の講義を配置し、人間福祉学の専門的知識を深めます。また、研究中間報告会を開催し、研究の進捗状況について確認を行います。指導教員のみならずその他の近接領域の研究者から助言を行うことで、論文の完成度の向上を目指し、個別指導の補強を行います。論文の審査過程には予備審査および本審査の段階を設け、複数の教員による十分な審査と指導を行います。

博士課程(後期)では、「自立した研究者としての能力育成」を重視します。

■ 主担当教員・副担当教員による丁寧な研究指導

- 希望した教員が主担当教員となり、緻密な研究計画のもと研究指導を開始。
- 副担当教員も配置され、研究遂行の幅広いサポートを受けられる。

■ 研究中間報告会(年3回)

- 毎年必ず1回以上は発表が義務。フロアでの参加も必修の位置づけ。
- 専門以外の近接領域の研究者から助言が得られ、論文の質を大きく高められる。

■ 論文審査体制

- 予備審査および本審査(最終審査 含む)の二つの審査過程を設定し、複数教員による十分な審査・指導。
 - 最終的に博士論文審査・口頭試問に合格すると、博士(人間福祉学)の学位が授与される。
-

5. 履修の流れ(3年間の流れと単位)

博士課程(後期)では、3年以上の在学と、以下の16単位の必修科目の修得が必要です。

※ なお、特に優れた研究業績がある場合は、1年以上の在籍で修了(学位取得)が認められる制度があります。

※ 大学院生間の交流、大学院生と教員との交流のために、『大学院交流会』があり、対面やオンラインで、自由な話し合いの場が設定されています。

博士号学位取得までの流れ



【1 年次: 基盤を固める年】(計 8 単位)

● 履修科目

- 人間福祉学特殊講義 A(2 単位)
- 人間福祉学特殊研究 I A(2 単位)
- 人間福祉学特殊研究 I B(2 単位)
- 人間福祉学特殊講義 B(2 単位)

▶ 研究テーマの明確化・先行研究レビュー・研究方法の習得を中心に進む。

▶ 年度内に研究中間報告会で発表。

「人間福祉学特殊講義 A」は、社会福祉学を中心とした講義を受講し、「人間福祉学特殊講義 B」は、人間福祉学における人間諸科学の講義を受講します。それぞれ、複数の教員によるオムニバス形式で講義をします。院生一人ひとりの人間福祉学専攻としての視座を定め、論文作成の礎を築くことを目的としています。

【2 年次: 研究の深化】(計 4 単位)

● 履修科目

- 人間福祉学特殊研究 II A(2 単位)
- 人間福祉学特殊研究 II B(2 単位)

▶ 実証研究やデータ収集、分析など、研究の主要部分を進める。

▶ 予備審査申請に必要な研究の形を整えていく。

▶ 中間報告会で発表し、多角的な助言を受ける。

【3年次:博士論文としての完成】(計 4 単位)

● 履修科目

- 人間福祉学特殊研究ⅢA(2 単位)
 - 人間福祉学特殊研究ⅢB(2 単位)
- ▶ 予備審査の通過後、博士論文の最終的な仕上げへ。
- ▶ 本審査(論文審査・口頭試問、最終審査含む)を経て研究科会議で合否決定。
- ▶ 卒業式・学位授与式にて **博士(人間福祉学)** を授与。
-

6. 博士論文審査基準

博士論文は以下の側面から総合的に審査されます。

I. 学問的意義と独創性

- 社会的・学術的背景を踏まえたテーマ設定
- オリジナリティのある新たな知見

II. 論理性と構成の整合性

- 論理展開の一貫性
- 章構成、文献リスト、注記など形式の適切さ

III. 論文としての適切性

- 先行研究の体系的整理
- 研究方法の妥当性
- 研究倫理の遵守
- 学術論文としての記述方法の適切さ

IV. 残された課題の明確化

■ 口頭試問では

- 研究の意義・成果・課題を簡潔に説明。
 - 質疑に適切に対応できるかが評価されます。
-

7. 修了認定・学位授与(ディプロマ・ポリシー)

「修了認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー)

建学の精神のもとに、所定の単位を修得し、かつ研究指導を受けた上で課程博士論文を提出し、課程博士論文審査および最終試験に合格した者に博士(人間福祉学)の学位を授与します。本課程の修了生は、現代社会における社会福祉を取り巻く問題・課題について、自立して研究できる能力を身に付けた人です。また、研究・教育職としてあるいは実践現場の指導者として問題対応力・指導力を身に付けた人です

博士(人間福祉学)の学位授与に必要な能力は次の通りです。

1. 科学的に課題を追求できる自立した研究能力。
 2. 人間福祉の実践を向上・発展させる高度な研究能力。
 3. 人間福祉学およびその近接領域における豊かな学識。
-

8. 本博士課程(後期)で得られる成長

博士課程(後期)を修了した研究者は—

- 社会福祉学を中心に、近接領域の知を統合し、
 - 実践に寄り添い、生活者の困難から生まれる問題意識を学問として深め、
 - 研究・教育・実践現場で指導的役割を果たすことが期待されています。
-

9. 本博士課程(後期)の大きな特徴

中部学院大学大学院 人間福祉学研究科博士課程(後期)は、「人間の生活と福祉」を総合的に探究する新しい学問＝人間福祉学を深める、特色のある博士課程です。人間福祉学専攻は、以下の分野から構成され、多様な人材の交流によって生まれる人間福祉学の構築と発展に寄与しています。

人間福祉学専攻は、社会福祉学分野、看護学分野、理学療法学分野、スポーツ健康科学分野、心理学・教育学等分野によって、構成されています。

学術的研究と実践の現場を往復しながら、

- 社会の様々な課題とそれに直面する人々に寄り添い、
- 科学的な方法で課題を解明し、
- 実践につながる研究を行う。

上記を基盤に置く研究者の育成を目指し、丁寧な指導体制と体系的なカリキュラムを用意しています。